



話題の本棚(合評)

ジャン＝マリー・シェフェール著、久保昭博訳

『なぜフィクションか？ ごっこ遊びからバーチャルリアリティまで』

特集／未来

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2 階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyoku/public_relations/

 **UNIV.** 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

フィクションがフィクションたる所以

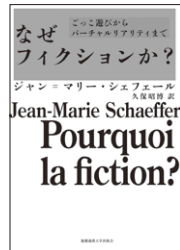
なぜフィクションか？

ごっこ遊びから

バーチャルリアリティまで

ジャン・マリイ・シェフェール著

久保昭博訳 慶應義塾大学出版会



私たちは、「バーチャルリアリティ」と密接につながった現在を生きている。そのもっとも顕著な例は、何と言っても「バーチャル・ユーチューバー」の出現だろう。彼／彼女らは実在しないにもかかわらず、私たちによってある種のスターとみなされ、時にそのパフォーマンスに世界中の人々から熱い視線を投げかけられる。

本書の著者ジャン・マリイ・シェフェールも、そんな現在の世界を予見していた。またユーチューブなどだけでなく、インターネットすら十分に普及していない、今から二〇年前の話である。「バーチャル」な世界と現実世界との間の深いつながりは、やがて「バーチャル」による現実の支配へとつながっていくかもしれない。そのような世界に対する漠然とした不安には、古代ギリシアから論じられてきた「フィクション」に関わる問題が潜んでいる、と彼は言う。本書では、プラトンの「ミメーシス」にまつわる議論から、アリストテレスの創作論、そして現代の「ごっこ遊び」理論に至るまで数多くの議論を引き合いに、人間の文化において中心的な役割を担う「フィクション」の本質を掘り下げていく。

本書における「フィクション」についての議論は、実に多岐に渡るものだが、ここでは評者の関心に引きつけて一っだけ紹介してお

きたい。それは「フィクションと指示」にまつわる問題である。これまで二〇世紀には、いわゆる分析哲学の分野を中心に「フィクション」の意味論的な定義が議論されてきた。私たちは言語を用いた記述によって、現実世界の中の様々な出来事を指示している。このことは文学的フィクションにおいても同様であり、私たちは言語による記述によって、様々な虚構的な出来事を記述するのだが、このとき、私たちは現実世界のあり様を指示しているのではない。たとえば「シャーロック・ホームズはベーカー街に住んでいる」と記述するとき、私たちはどのような現実のあり様を指示するのでもないのである。このような指示された対象の欠如に、「フィクション」的言明の特徴づけが試みられるようになってきた。フィクション的言表は、意味はもつが指示対象はもたない——言わずと知れたフレーゲ流の定式化である。このような定式化をめぐる議論はやがて、可能世界意味論などを含む三つの方向に進展していった、とシェフェールは言う。フレーゲ以降の議論に、ラッセルの「記述理論」が参照されないのは、「フィクションと指示」問題を論じるものとしてやや異色だが、「フィクション」をめぐる意味論の展開について、本書は実にスマートなまとめがなされていると評価できる。

もっとも、ここに取り上げた話題は、シェフェールによる議論のほんの一例にすぎない。本書ではこの他にも「フィクション」をめぐる美学的問題や、演劇や映画といった「フィクション装置」のメカニズムなどが言及される。「フィクション」がフィクションたる所以は一体何なのか——この問題の奥深さを、読者は身をもって実感することになるだろう。

合評『なぜフィクションか?』

「この作品はフィクションであり、実在の人物等とは無関係です」

タイムリーな話題を導入しよう。ある学者が自身の論文の中で論拠として紹介・論文引用した神学者、その存在が当の学者の全面的な捏造だったという事件が先日起こった。いわば、その神学者は学者によって作られた「フィクション」だったというわけだ。

なぜこの話題を取り上げるのか。実は本書の中に類似の事例が紹介されている。ヒルデスハイマーという作家が音楽家モーツァルトの伝記を書いた。続けて彼は『マーボット。ある伝記』というタイトルの伝記本を出版する。主人公アンドリュー・マーボット卿とは一九世紀初頭の評論家で、ゲーテやショーペンハウエル、ドラクロワなど広範な分野の著名人と交際する多才な人物であったことが記され、その本は当時の悲劇的人物の新発見だと評判になった。さて、後に作家自身の口からこのマーボット卿なる人物は全くの架空人物つまりこの伝記本は「フィクション」であったことが暴露された。

モーツァルトの伝記本は伝記、マーボット卿の伝記本はフィクション。なぜ両者とも伝記として一般に受容されたのか。作家は偽の伝記を書いたという批判に対し、根拠とした資料には偽の出典を手がかりとして示しており、調べれば虚偽であること、つまり作品や人物自体がフィクションであることがわかったと反論する。

フィクション研究における問題提起は主に、フィクションをフィクションとして成り立たせる要因を識別することが可能かという観点から成されてきた。例えばジョン・サルは「統辞論的であろうが意味論的であろうが、あるテキストをフィクションの作品と識別することを可能にさせるテキスト上の特性は存在しない」と語る。

つまり、テキストがフィクションであるかどうかはテキストだけで

は判断出来ず、作者もしくは語り手による断り書きや意図の表明があつてはじめて識別できるというのである。これに対してゲーテ・ハンブルガーは『文学の論理』において、テキストに内在する文体的指標によってフィクションであることは識別可能だという主張を展開した。しかしこれらの主張が見落としている点がある。それは『マーボット。……』の部分で言及した受容の側面である。

著者に先駆けてフィクションの受容について「ごっこ遊び」理論を唱えたのがケンダル・ウォルトンである。彼はアリストテレスの唱えた「ミメシス」再現行為を「ごっこ遊び」として解釈し、作品世界への心的没入の有様を捉えようとした。著者シェフェールはそれを人間の認識能力の発達の側面へと適用し、人は「ごっこ遊び」を通じてフィクションを創造し、かつ受容する能力を磨くのだという画期的な主張を展開する。こうして、フィクションとは作品がフィクションであるという前提を作り手・受け手が共有した上で見せかけを楽しむ働き、「共有された遊戯的偽装」という定義が与えられる。これはサールの論理を受け継いだものだが、シェフェールはここに、これまでになされてきた様々な観点をまとめ、かつ作品の受け手の心的姿勢という新たな視点を加えた。著者によるとフィクションとして読者が没入出来ない『マーボット。……』はフィクションになり損ねた物語作品だというのだ。

かつてウォルトンの『フィクションとは何か』を書評した者として、そこで言及した書物が邦訳され、それを書評出来るというのは懐かしくまた嬉しい限りである。

(ねい)

(三三二頁 税込五四〇〇円 1月刊)

幼年期の終り

アーサー・C・クラーク著
福島正実訳 ハヤカワ文庫SF

本書が出版されたのは1953年。もはや古典と呼ぶべき作品かもしれないが、それでも未来を舞台に人類の行く末を問うた本書の魅力はいまなお色褪せない。



米ソが宇宙開発にしのぎを削っていたある日、突然世界中の大都市の上空に宇宙船団が現れた。上帝——けっして姿を現さない船の主を、人類はそう呼んだ。彼らは圧倒的な科学技術でもって人類から抵抗の意志を奪い、核兵器放棄や差別撤廃を押し進めた。かくして、オーバーロードによる五〇年の統治によって、世界に平和が訪れた。戦争、犯罪、貧困、疾病……これらは過去のものとなった。ユートピアの到来。それでも、地球に干渉する目的の見えないオーバーロード、そして目的の見えない自分自身の生に思いを巡らせたとき、いまだこう疑念を抱く者もいる——「われわれはこの先どこへ行くのだろうか?」。圧倒的な力を前に、まだ冒険心や創造力を失っていないわずかな人間が抵抗を企てる。

オーバーロードの支配に反抗するジャンは、彼らの宇宙船に乗って母星に行こうと一計を案じる。「しかし、ときどきぼくは思うのだ、ぼくらにも独立独歩でやってゆくチャンスがあってもよかったのではないか、と」。だが密航に成功して帰還したジャンは、変わり果てた地球の姿を目の当たりにする「最後の人間」となっていた……。

オーバーロードに比して、人類はどうしようもなく卑小だ。しかし評者は、地球滅亡の様子を記録した「最後の人間」が頭から離れない。「われわれはどこに行くのか?」、最後の瞬間までこの探求心に憑かれた人間を、愛さずにはいられないのである。(ミセ)

(390頁 税込907円)

特集

未来

未だ来たらぬもの、で「未来」。明るく開ける未来もある。現在に不満をもつ人びとが理想を未来に描き、きつとそれがやって来ると待ち望んだ。一方で、現在に警鐘を鳴らすような、重苦しくのしかかる未来もある。未だ手に入らないものを、人はあれこれ想像せずにはいられない。今の世界に耳を澄まして、どんな未来を描こうか。

(ミセ)



**ダイソン博士の太陽・ゲノム・インターネット
未来社会と科学技術大予測**
フリーマン・J・ダイソン著
中村春木、伊藤暢聡訳 共立出版

近未来の予測は誰にとっても面白いものである。「次に来る」技術を紹介した記事はビジネス系のニュースサイトの定番であるし、人工知能のもたらす未来について書かれた書籍は多数出版されている。しかし、こうした予測はどの程度実現するものなのだろうか。例えば、今から約二〇年前には何が予測されていたのだろうか。

2000年に出版された本書は、物理学者フリーマン・ダイソンが近未来の技術について語った公開講座を基にした一冊である。タイトルにもあるように、今後太陽・ゲノム・インターネットの三つがキーワードになると予測している。確かに、現在太陽光発電は普及し、地球上のあらゆるところで電力源として利用されている。遺伝子に関する技術も普及し、さまざまな産業で活用されている。そして、インターネットは言うまでもなく、今日の社会の基盤の一つである。本書で描かれた未来の予想図は、すでにある程度実現しているようである。

しかし、まだ実現していない予測もある。技術の進歩は、社会正義を実現する方向に働くと筆者は主張している。歴史上、新技術により公衆衛生は改善し、また悲惨な労働も減ったため、この傾向を外挿すればそうなるという予測である。確かに、現代の世界は生活の物質・情報に関する面では貧富の差が少なくなったと思われる。しかし、こうした事情がまた別種の分断と不正とを生んでいるというのが現状ではないだろうか。

単なる未来予測の書としてのみならず、科学技術と倫理に関する考察としても興味深い一冊である。

(蔵餅)

(192頁 税込1944円)

声の物語

クリスティーナ・ダルチャー著
市田泉訳 早川書房

「言いたいことも言えない
こんな世の中じゃ」平成初期
にそんな歌詞の曲があった。
時代が移りゆく今、そんな世
の中になってはいないだろう
か？ この本は現代に広がる
「毒」を暗示する、今読
むべきディストピア小説である。



ある日アメリカのすべての女性から「声」が奪われた。大統領の強制的な政策のもと、すべての女性の手首に、一日百語以上話すと強い電流が流れる「ワードカウンター」がつけられた。元認知言語学者のジーンは、夫や息子たちとともに暮らしていたが、突如彼女の前に大統領の側近たちが現れる。かつて失語症の研究をしていた彼女は、事故で脳に損傷を負った大統領の兄を治療する研究を、「声を与える」ことを条件に依頼される。そして彼女は「声」をめぐる戦いに巻き込まれていく――。

彼女は声を、自由を求めている。しかし「声」を取り戻したとき、夫にかけられた言葉はあまりにも冷たく彼女に突き刺さった。《なあ、ベイビー。きみが黙っていたときのほうが、ましだったんじゃないかな》――。

情報化やグローバル化によって社会はめざましく変化し、過去よりも「自由な」社会が実現したように思える。しかし、現代の我々にも、見えない「ワードカウンター」がつけられてはいないだろうか？ 電流こそ流れないが、「声」を挙げられないことがあるのではないか？ 言いたいことも言えないこんな世の中で、平成初期に流れたあの曲と、本書が静かに重なった。「まっすぐ向きあう現実」に誇りを持つために戦う事も必要なのさ――。来るべき未来に、「声」はあるか？

(出席点)

(360頁 税込2052円)

ディスペンセーション主義

聖書を字義通りに理解するために

チャールズ・C・ライリー著

前田大度訳 エマオ出版



右記の芦名・小原両氏の共著でも分かるように、未来とキリスト教終末論の関係は一筋縄では行かないものがある。当のキリスト者にとっても、空漠たる観念や像しか結べないことは珍しくない。他方、未来的終末のイメージに明確な輪郭を与える試みは現代でも主に福音主義者、とりわけファンダメンタリストの間で盛んだが、その神学潮流のひとつとしてディスペンセーション主義を挙げることができる。本書はその定評ある基本書だ。

ディスペンセーションとは、神の栄光を現す目的に基づく神の計画の実行過程における段階的な世界の経綸のことである。ディスペンセーション主義は、聖書の字義的すなわち歴史的・文法的解釈を原則とし、イスラエルと教会を区別したうえで、歴史に複数の、大抵は七つのディスペンセーションを認める。それによれば、キリスト到来以後の現代は第六の「恵みの経綸」の時代であり、未来には最後の「千年王国の経綸」が予定されている。この移行期をめぐる議論が興味深いのだが、結論だけを述べると、まず信者・教会が空中に携挙され、地上を七年間もの患難が襲った後にキリストが地上に再臨し、千年王国が樹立されるのである。時は切迫している。

アメリカの大衆の間では多くの信奉者をもつディスペンセーション主義だが、その聖書解釈の方法や、あるいは携挙を待望する者にみられる、預言の成就のためにイスラエルを支持するほかに現在の社会構造に関心を抱かない傾向には当然ながら批判も多い。信仰の根本に関わる激しい対立が目立つ分野だが、本書の手堅い論述はいかなる立場の読者にも読みやすいものだ。

(霊人)

(240 頁 税込 1620 円)

キリスト教と現代

終末思想の歴史的展開

芦名定道、小原克博著

世界思想社



過去から現在を経て未来へと不可逆的に流れていく直線的な時間・歴史意識がユダヤ・キリスト教的なものであることはしばしば指摘される。過去には世界のはじまりがあり、未来には世界 ^{エスカトロジー} の終わりがある。終末論とは「最後の事柄」についての教説であるはずだ。しかし、現代日本を代表するプロテスタント神学者の二人がキリスト教終末論をめぐる広範な主題を論じた本書を読めば、実は終末論と未来の関係はそう自明ではないと気づかされる。

イエスの「神の国」をめぐる言説に未来性と現在性がともに読み取れることを反映してか、終末論の照準は揺れ動いてきた。19世紀のリベラル神学のリッチェル学派では「神の国」は人間の歴史の目標である理想社会とされるに留まっていた。世紀末から20世紀初頭にかけてヴァイスとシュヴァイツァーは聖書研究を通して、世界全体の終焉を説く黙示的終末論者としてイエスを再解釈した。しかし、その後の新正統主義の神学者たちは概ね終末を永遠と現在の弁証法において捉えたといえよう。ところが、1960年代に議論は再び転回し、パネンベルクやモルトマンが黙示的終末論の未来的契機を再評価するに至る。

そもそも前近代においても、一方でアウグスティヌスは千年王国論を否定し、「神の国」をそれと対比される地の国において教会が代表するものと解釈した。他方でフィオーレのヨアキムは黙示的終末論を復活させ、ユニークな千年王国論を説いたのであった。

かくして複雑な変遷を遂げてきた終末論を通じて未来について考える意義と、そこに胚胎する、既存の社会システムを打破する可能性を本書は多方面から論じている。

(霊人)

(266 頁 税込 2052 円)

新刊コーナー

どこに転がっていくの、
林檎ちゃんレオ・パルッツ著
垂野創一郎訳 ちくま文庫

可愛いタイトルとそれに噛み合わない帯のうたい文句、『007』シリーズの作者イアン・フレミングの讃辞が気になって手に取った本だったが、読んで圧倒された。

舞台は第一次大戦直後のヨーロッパ。ロシアの捕虜収容所から解放されたオーストリア軍の将校ウィットーリンはかつて収容所の所長セリュコフから受けた侮辱への復讐を誓い、復員後の生活や家族・捕虜仲間との交流を捨てて故郷からロシアへと舞い戻る。そしてそこは既に新たな戦いの最中にあった、すなわちロシア革命に端を発する内戦である。権力を握る者が日毎に変わるような世界で異邦人のウィットーリンは素性や目的を疑われながらもひたすら宿敵セリュコフの行方を追う。

これだけでも眩暈のしそうな話だが、加えて印象的なのは主人公ウィットーリンの存在だ。

終戦後、誰もが自分自身の現在の生活や将来のために行動しようとする中で彼だけはいわば過去に囚われて闇雲に相手を追い続ける。ひたむきさのベクトルが周囲と正反対の彼は、彼と関わる人々にとっては「転がる林檎」ならぬ「転がってくる岩」のような不条理さを呈する。だがそれもまた人間の魅力の一つ。ドストエフスキー作品に出てきそうなぶっ飛んだ人物や約束を守って主人公を助ける元敵の将校など脇を固める人々も中々キャラが濃い。タイトルの由来、追跡劇の結末も含めて味わい深い一冊である。

(三三四頁 税込一〇二六円 12月刊)

酒呑みに与ふる書

キノブックス編
キノブックス

村上春樹のカケテル、江戸川乱歩の日本酒、北方謙三のシングルモルト・ウィスキー

……。「酒」に焦点を当て、様々な文学者・評論家・思想家が紡ぎだした四五の小品。酒と人との関わりの多様さ、複雑さを反映する

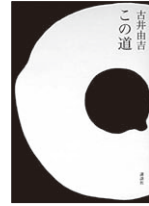
ように、あるいは酔っ払いの精神状態を表現するように(?)その形式はエッセイ、詩、俳句、ショートショートや漫画とてんでバラバラ。内容も同断で、文芸評論家を故人に引き合わせる思い出の酒(銀座レクイエム——樋口修吉・福田和也)や、シェークスピアに色彩を与えるビール(「冬物語」田村隆一)、化学徒を酒に変える魔の薬品(あるいは酒でいっぱい海)筒井康隆)といった文学作品から、酔った人々を「醒めた」目で見える作家のエッセイ(「酔っ払い電車」角田光代)、アルコール中毒になった作家の告白(「飲酒自殺の手引き」中島らも)、体質的に酒の飲めない評論家が「酒と楽しむ」食事に物申す食事文化論(「食卓の愉しみについて」中村稔)まで、実に千差万別多種多様。それでいて、それぞれ独自の角度から、酒の本質を射抜いている。

どこから読み始めてもよい、どこでやめてもよい。本書は、心地よい酔いのもたらすとりとめもない空想のように広がり、読者の視野を押し広げてくれる。

お酒に詳しい貴方も、まだお酒と付き合い始めて日の浅い貴方も、次なる名酒との出会いに期待しながら、これぞという一文を見つけてみてはいかがだろうか。(投稿・筒井)

(二三三頁 税込二六二〇円 1月刊)

この道

古井由吉著
講談社

「未だ生ヲ知ラズ、焉シテ死ヲ知ラン」。若いわたしは表面上わかった気になってしま

う言葉だが、死に近づいた人間はこの言葉をどう読むのだろうか。随筆とも小説とも言いがたい本書では、精妙な内面世界を描いた『杏子』の作家が、齢八〇を越えて死についてさまざまな想念を巡らせる。

書き手の個人的な体験に、神話や古典のエピソードが挿し込まれつつ文章は綴られる。

たとえば冒頭の孔子の言葉については、死を理解するためには生における人格未分の境地まで、つまり命のはじまる出生にまで遡らねばならないのではないかと、と解される。「母胎の内であった時、さらに受胎の時までさかのばれば、はるか地の底の、忘却の湖に漂っているに等しい」。生も死も、個人を超えた岸辺に立って初めて知るものなのだろうか。

あるいは、書き手の戦時中の体験が語られる掌編もある。炬燵に入った幼子に添い寝し

た青年が、ほどなく戦地の露と消えた。その青年のことをしるのんで問う、「いつまでも若い死者を見る生者の心は、歳月に侵蝕されてもその奥底では、死者を最後に見たその現在に留まっているのではないか」。死者が死者となることを知らなかった当時の自分は、不気味なものに映ずる。死という結末が雄弁にものをいう現在と比すれば、当時の自分の無知は「死者の沈黙」に通ずるのではないか。

生死はゆるやかに結びあう。生の日向を歩く若いわたしだが、翳りを帯びた光と、そのなかを歩む氏の後ろ姿を想った。（ミセ）

（二五八頁 税込一〇五二円 1月刊）

ダヴィッド・ジョップ詩集

ダヴィッド・ジョップ著
中村隆之編訳
夜光社

ダヴィッド・ジョップ

ヨップはネグリチ

ュードの詩人である

る。ネグリチュー

ドとは、彼が一篇

の詩を捧げているマルティニック島出身の詩

人・政治家セザールが一九三〇年代に創造した概念だ。『ネグリチュード辞典』によれば



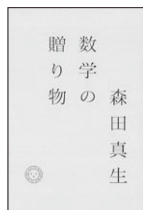
「黒人が世界における自らの地位を捉える意識と、この意識化が黒人の芸術的表現と政治的熱望に浸透させる叛逆」と定義できる。

一九二七年に生まれ、幼少期をセネガルで過ごし、パリで思想形成を遂げたD・ジョップは、『プレザンス・アフリケーヌ』誌を舞台にネグリチュードの詩人として活躍し、一九六〇年に飛行機事故で急逝した。本書は、後にセネガル初代大統領となるサンゴールが編み、サルトルが序文を寄せた『ニグロ・マダガスカル新詩華集』（一九四八年）所収の五篇と、唯一の単独詩集『杵つき』（一九五六年）所収の一七篇の詩が集成され、他に散文四篇と訳者による小伝が付されている。

植民地出身の知識人であるD・ジョップは同化主義と安直なアフリカ主義の双方を峻拒し、なお「民衆の根っこから切り離されたフランス語表現アフリカ詩は、歴史の見地から有罪を下される」と冷厳に自己の限界を見極めていた。然るに歴史的使命の自覚からうたわれた、虐げられた黒人の嘆きと叛逆、同胞愛は時空を超えて響き渡る。「私は言う、強い勢力の暴風雨が／忍耐を売る商人どもを粉碎するだろうと／そして人々の体と調和する季節は／幸福の身振りが作り直されるのを見るだろうと。」

（九三頁 税込一二九六円 3月刊）

数学の贈り物

森田真生著
ミシマ社

「将来やりたいことが見つからない。」このエッセイ集はそんな人にとって、かけがえのない「贈り物」となるだろう。

著者の森田真生は「独立研究者」として現在では京都を拠点に活動している。「数学の贈り物」と題されてはいるが、このエッセイ集は単なる数学の研究報告書などではない。数学にとどまらず、孟子や芭蕉など、あらゆる分野の先輩の言葉を手掛かりに、彼の思考は歩き出す。彼の紡ぎ出す言葉は、時に証明のようには明瞭で、時に素数のように奥深い。数学を「緒（いとづち）」に、彼の思考はどこまでも広がっていく。そして19篇のエッセイを経て彼が辿りついたその場所は、「いま」というこの一瞬だ。《目の前の何気ない事物を、あることもないこともできた偶然として発見するとき、人は驚きとともに「ありがたい」と感じる。」「いま（present）」が、あるがままで「贈り物（present）」だと実感する

のは、このような瞬間である。》

変化の激しい世界に生きる我々は、明日の自分がどうなっているのかさえわからない。そして我々大学生は、研究・就職・結婚……と、「未来」を何とか捕まえるために、明日に向かって歩き続ける。そんな、「未来」を生きねばならない「いま」だからこそ、本書を開いて一度立ち止まってみてほしい。あなたにとっての「贈り物（present）」は、過ぎ去りし昨日でもなく、未だ来たらざる明日でもなく、「いま（present）」というこの一瞬にあるかもしれないのだから——。（出席点）（二五八頁 税込二七二八円 3月刊）

波

ソナリ・デラニヤガラ著
佐藤澄子訳
新潮 Crest トブックス

二〇〇四年、東南アジアを襲った地震をどれだけの人が覚えていたろう。津波は圧倒的な力で日常をなぎ倒し、終われば平穏な表情で元の海に戻っていった。そして被害は忘れられる、傷を受けた者だけを残して……。



本書の著者ソナリ・デラニヤガラはあの日全てを失った。育ててくれた両親、人生をともにするはずだった伴侶、愛する二人の息子。自分のすべてだった家族を一度に失い、一人だけ生き残ってしまった。「この世界で理にかなっていったことは、全てあの波に碎かれてしまった」。

その事実を認められないソナリ。何度も現実の方が夢で、本当はみんな生きていてのではないかという幻想に引っ張られる。そしてその幻想に恐怖する。夢を見るのが怖くて、でも酒を飲まないとい心が潰れてしまう。現実にも幻想にも居場所がない彼女には、寄せては返す波のように、静寂は訪れない。

あの日を境に普通にできた生き方は、耐えがたい試練となった。楽しかった思い出は、今を哀しくさせる記憶となった。それでも彼女は過去を書く。そして何度も傷つきながら、愛しかった日々を確認していく。

無残にも家族を失った時、優しい日々も忘れるべきなのだろうか。無慈悲な現実に押し流されても、人は世界を愛する力を取り戻せるのだろうか。もし幸福が不幸と切り離せないと考ええるならば、本書の痛みの言葉の中に見出せるはずだ。臍気ではあるが失われたい、幸せのちからを。（きもの）

（二二四頁 税込二二六〇円 1月刊）

論証のルールブック「第5版」

アンソニー・ウェストン著

古草秀子訳

ちくま学芸文庫

大学の課題から

就職活動まで、自分の意見を言わなければならない場面は多い。こゝで

必要なのはもちろん、何でもいいかから何かを発言することではなく、中身のある意見を適切に述べることである。すなわち、議論・論証ができないといけない。



議論の方法について述べられた書籍は多いが、その中でも本書は特色ある一冊である。

タイトルの通り、論証にあたって押さえておくべき「ルール」を説明することが主な内容である。目次を眺めているだけでも、なるほどと思わせるものがある。例えば、ルール1は「前提と結論を決める」というものであるが、日頃これを実践できている人はこれだけいるだろうか。ルールにはこうした基本的なものから、例証や類推の使い方、さらには口頭での論証の注意点に至るまで、様々なものが挙げられている。どれも簡潔にまとめられており、必要に応じて参照しやすい作りにな

っている。また本書のもう一つの特徴として、他人の意見を聞くことの重要性が繰り返し強調される点がある。議論というと、どうしても勝ち負けの話になりがちであるが、それは問題の解決に資するものではない。それゆえに、もっと建設的に対話を進めるように心掛ければならないのだ。

本書は文庫本であるため持ち運びやすく、またページ数もそれほど多くない。すぐに読み終え、内容を実践することができそう。手元においておけば、様々な場面で役立つこと請け合いの一冊である。

(二四頁 税込一〇八〇円 4月刊)

(藤餅)

データは騙る

改竄・捏造・不正を見抜く統計学

ゲアリー・スミス著

川添節子訳 早川書房

統計不正問題が

昨今話題であるが、

データの雑な扱い

に起因する問題は

特に珍しいことで

はない。例えば、かつて日本ではインフルエ

ンザワクチンの学童集団接種が行われていたが、効果を疑問視する調査の影響で中止とな



った。しかし、その研究はデータと分析の両方に問題があり、結局インフルエンザによる死亡者数は大幅に増加してしまった。

このように、統計やデータの取り扱いには時に人命にかかわる重大な問題である。それゆえ、怪しい統計に騙されないための方法を述べた本書はきわめて有用な一冊であろう。主な内容は、「手口」ごとに怪しい研究・分析の例を紹介し、その問題点を指摘していくことである。例えば、人は誕生日が終わるまで死期を伸ばせるという噂を聞いたことがあるだろうか。この話の元ネタの研究では、データを都合のいいように分けて処理しており、まともには分析するとそのような結果にはならないという。紹介される具体例は、ワールドカップの試合結果を予測するタコや超能力など、どうみてもうさん臭いものから、コーヒーはある種のガンの原因になるといふ、思わず信じてしまいそうになるものまでさまざまである。総じて平易な語り口で読み物として面白く、また数式などは全く出てこないため誰でも興味深く読めるだろう。

データに基づくと説明されると何となく納得してしまいがちだ。しかし、判断を下す前にぜひ一度立ち止まってほしい。本書はそのための助けになるはずだ。

(三二頁 税込二六〇円 2月刊)

(藤餅)

運命論を哲学する

入不二基義、森岡正博著

明石書店



「哲学」なる学問の内部で、実際に何がなされているのかについては、今ひとつイメージ

しにくいところがある。それは、豊かな髭を蓄えた「哲学者」が独り、書斎の安楽椅子で彼なりの思索をめぐらせることなのだろうか。はたまた、古くて分厚い「哲学書」を一行一読み解いていくことなのだろうか。

「哲学」に対するそんな閉鎖的なイメージは、本書の前で脆くも崩れ去る。数年前に開催されたイベント「現代哲学ラボ」の模様を書籍化した本書は、現在の日本の哲学（「J-哲学」）の議論がどのように展開されているかを教えてくれる。ここでは、第一線で活躍する哲学者の森岡正博が入不二基義オリジナルの〈あるようにあり、なるようになる〉運命論を紐解いていく。入不二の「運命」に関する議論はやがて、可能性や必然性に関する議論、「現実性」というものをどう捉えるべきなのかという問題にまで発展してゆく。

森岡による入不二流「運命論」の解説付きとはいえ、ここで展開される「入不二ワールド」は、初読者には骨のある議論である。しかし本書を読むことによって、私たちが何気なく使う「運命」という言葉が、そのような議論を呼び、やがて二人の哲学者の格闘によって、新しい哲学が現在進行形で生まれてゆく貴重な瞬間を見届けることができる。なおこの「現代哲学ラボ」シリーズは、続いて開催された別日のイベントの模様も書籍化される予定である。本書を読んで興味をもたれた方は、続報を待たれたい。

（三〇四頁 税込一九四四円 4月刊）

（八雲）

『教行信証』入門

阿満利磨著
筑摩書房

「自業自得」「因果応報」「縁起」など仏教の言葉は現代の日本語にも姿を現し、その思想は今なお私たちの感性に影を残している。けれども経典は漢字ばかりでとっつきにくい。どこかに良い入門書がないものかと思ってい

たときにこの本と出会った。

『教行信証』とは法然の弟子にして浄土真宗の宗祖である親鸞の代表的著作である。鎌倉時代に彼らは、修行による悟りを目指す「自力」中心の伝統仏教に抗して、念仏を唱えれば成仏できるという「他力」本願の教えを説いた。この書物は題名の教・行・信・証をそれぞれ解説した各巻で主に構成される。「教」ではインドから伝来してきた経典のどれが根本かの解釈と論拠が提示され、「行」では行い、つまり念仏を称えること（「称名」と言う）で成仏できる根拠が論じられる。「信」では信心を一旦差し置いてさえ称名することの重要性が説かれ、「証」では還相回向という仏教の他者論が展開される。

親鸞が師の法然から継承したのは「他力」の問題であった。著者は、親鸞が各所でこの言葉へと舞い戻ってくる様子を懇切丁寧に描いている。浄土真宗についての予備知識を持っていないくても心配はない。本書のやさしい語り口が難解さを解きほぐしてくれているだろう。あるいは紹介された用語の意味を道平ばで忘れたとしても、著者は必要であればなんども繰り返し説明してくれる。本書との出会いを通じて、自分の根底に流れる大きな思想の片鱗に触れたような気がした。

（二八五頁 税込二二七六円 3月刊）

（三ツ葉）

大政翼賛会のメディア

ミックス

「翼賛一家」と参加するファシズム

大塚英志著 平凡社

アニメやゲーム、

映画や演劇、キャ

ラクター商品など、

企画コンテンツが

様々なメディアに

展開され、さらに二次創作までを範疇に含める

宣伝手法がメディアミックスと呼ばれる。

最近ではお馴染みのこの手法が実は戦時中に

用いられ、いわゆる総動員体制の構築に一役

買っていた。本書は、あまり知られていない

そんな広告史を描き出してくれる。

「翼賛一家」と呼ばれる戦時中の企画は、

漫画家協会によって大まかなキャラクターデ

ザインや世界観の設定がなされ、告知から半

年で中心的なメディア展開が行われるという

迅速なものだった。版權は大政翼賛会が管理

し、その呼びかけの下にクリエイターが集ま

って「自由」にその世界観を作品化していき

新聞などの報道メディアも媒体にして企画展

開される。そこに描き出された理想としての

「一家」の姿は、「隣人との垣根を取り払い」

「日常」生活の中で「町内」一丸となって



「協働」し、「科学の心」を大切にする家族。その理想像に追隨する作品を発表し、またそれを読んで啓蒙されることで自主的に総動員体制への参加が作者にそして読者に動機付けられる、それこそが「翼賛一家」の枠組みを作った大政翼賛会の意図だったのだと著者は看破する。

本書ではさらに手塚治虫と「翼賛一家」との関係にも触れられている。戦時中のこの文化政策にまた新人漫画家であった彼がどう関わるのか、サファルチャーや手塚治虫好きの人には一読を勧めたい。

(三〇四頁 税込二七〇〇円 12月刊)

社会科学と因果分析

佐藤俊樹著

岩波書店

《繰り返し検証

を行える実験では

なく、一回しかない

歴史的事象を、

どのようにして科

学的に分析できるのか?》



このような疑問を持った学生も多いだろう。科学というからには検証が必要であり、同じ

条件での実験が難しい社会的現象を分析する社会科学は科学なのだろうか。このような難問に正面から挑み、事例研究と因果分析の方法論を確立させた知の巨匠こそ百年前の社会学者マックス・ウェーバーである。本書は従来のウェーバー解釈を更新させるだけでなく、統計的因果推論など現代では広く使われる方法論の基礎にウェーバーの影響を考える。故に文理問わず読める本だ。

ではウェーバーはどのようにして方法論を作ったのか。本書は日本におけるウェーバー研究では無視されていた統計学者ヨハネス・フォン・クリースの影響を重要視する。クリースの因果推論では、仮定Sを想定すること、観察されるデータにおけるEの出現率から原因を分析した。もしSがなかったらEは出現していないと考えられる場合、SはEの原因となる(反事実な推論)。ウェーバーはこのような因果推論を歴史学や社会科学に応用した有名な「プロ倫」を執筆した。こうした方法論は仮説的だが、論理的な検証可能性に開かれることで科学的となる。

学問をする上で内容以上に方法論の学習が必要となる。現代で広く使われる方法論の基礎を考える本書は、難解ではあるが読まれるべき一冊だろう。

(四一七頁 税込三〇二四円 1月刊)

官僚制と公文書

改竄捏造・付度の背景

新藤宗幸著 ちくま新書

一部の政治家の利益に資する認可、土地の売却、文書の改竄等が話題となったのは記憶に新しい。官僚による不正と言えば、少し前ならば官官接待や天下りが専らだったことを踏まえると、隔世の感がある。

行政学の大家である著者は、これらの問題の原因が、特定秘密保護法の制定に代表される秘密主義的な政治傾向、首相の権限強化による「政治主導」の完成にあると指摘する。

元来、「官僚主導」に對置される「政治主導」は民主主義にとって好ましいと考えられてきた。しかし、現在の「政治主導」は民主主義をむしろ損ねているのではないか。著者は、公文書管理に関して外部の視点を導入した上で、「暴走」する政治主導に歯止めをかける仕組みが必要だと論じる。

一時期はバッシングされていた官僚が「官僚頑張れ」と応援される時代。しかし、官僚はあくまで非選出勢力であり「代表」は政治家である。重要なのは適切な官官関係の構築にある。本書は詳細な制度解説も含め、その手掛かりを提供する一冊である。(投稿・敷池)

(二五〇頁 税込八八六円 5月刊)

マルクス・ガブリエル

欲望の時代を哲学する

丸俊・NTK欲望の時代哲学制作室 NTK出版

現代社会——広告に至るところで空っぽな夢を売り、人々は膨大な情報へアクセスできるスマホを手に、何を求めているか急ぎ行く。この異様な日常はいつ始まったのか。私たちはこの時代をどうやって生き抜けばよいのか。

本書はあの有名な『なぜ世界は存在しないのか』の著者マルクス・ガブリエルの日本滞在を密着取材した言行録である。大都市、東京・大阪・京都で彼が呟やく言葉や番組に出演した際の講義録、さらには専門家とのロボット社会についての対談が収められている。

彼の態度は両義的だ。空虚で忙しない産業社会を批判しつつも、交差点を行き交う群衆を「美しい人々」と表現する。彼は現状を単に全否定するのではなく、批判的にではあるが受容する。そしてこの現代に対応するために哲学をグレートアップしなければならぬと主張するのだ。渦の中で生きていく術を模索する一人の哲学者の姿が浮かび上がる。

巨大な流れに飲み込まれ、訳も分からず日々を過ごす私たちにとって、彼の真摯な言葉は一筋の光となるだろう。(三三葉)

(二四〇頁 税込八八六円 12月刊)

三条実美

内藤一成著

中公新書

本書は近代日本の最長官班三条実美の評伝である。三条特有の難しさというのか、志士経験のある清華家当主としての過激な思想信条と心身虚弱で優柔な政治姿勢の重なり合いは本書でも読みどころではある。薩長の志士よりも矯激な意見で維新を牽引する三条も読みどころだが、本書の眼目は実は維新後、太政官運営者としての三条の叙述にある。

太政大臣の職責を調整役として果たしつつ守旧派を切り崩し、維新の果実を守る三条は、内閣制度の整備に当たり、自身が変革にたちふさがる政治的障害となる。それを三条は自身が初代内大臣として「府中」から「宮中」へ退くことで解決する。「フロック」ではない三条の主体性を重視した描写は明治百五〇年からの出版とも共鳴しながら明治維新史全体に恐らく影響を与えよう。

宮内庁在勤の実証的・抑制的な著者の筆なればこそ革命家としての志向が強すぎる三条を叙述しきった。流感に倒れた三条に明治帝が与える栄誉とその意味がわかるまで読み通したい一冊。(投稿・とつこ)

(二四八頁 税込九〇七円 2月刊)

——平成の犯罪に耳をすまして——

犯罪者の言葉に耳を傾けることは難しい。動機を理解してしまうと、どこかで犯罪を肯定しそうになる。被害者のことを考えれば、語るといふ事実にも許せなくなる。しかし誰もが否定してしまう無差別な事件に、その犯罪者の声に、一度耳を傾けてみる。犯行を肯定せず、しかし他者を否定しない態度とともに……。

——大事なのは殺さない理由——

秋葉原事件を起こした犯人、加藤智大は『解+』という本を書いている。副題は「秋葉原無差別殺傷事件の意味とそこから見えてくる真の事件対策」だ。当時評論家や専門家は、犯罪を起こした理由を物語のように扱った。家庭環境、職場の状況、ネットのなりすまし。加藤はそうした分析的な射す、事件の予防策が打てていないと語る。故に加藤自身が、事件対策のために本を書いた。

そこで重要なのは犯罪を「やった理由」ではなく「やらない理由」の方を考えるべきだ、という主張だ。誰もが人を殺す潜在性を持っている。しかし多くの人は「やらない理由」を持つことで行為に移されることはない。加藤は事件を振り返る中で、自分自身がそうした「やらない理由」を失ったことを分析する。迷惑をかけたくない誰か、今より良くなるという未来。そうしたものを失わないようにすることが、真の事件対策になるはずと語る死刑囚の言葉は、今の私たちに痛烈に突き刺さる。

また「黒子のバスケ事件」といわれる一連の脅迫事件を起こした被告、渡邊博史が書いた本『生ける屍の顛末』は、無差別犯罪の動機を鋭く分析している。冒頭意見陳述で「無敵の人」という言葉が話題となったが、それに続く最終意見陳述は目を見張る分析なので、

一読されてほしい。(ネットでも読めます。)

渡辺は一連の事件を「欲望欠如型犯罪」と分析する。普通の人は自分の存在を疑わず、欲望を持つことを自明と考えるが、この世界には自分自身の存在すら不安定で、幸せの欲望すら自分で許せない人間がいる。「生ける屍」という用語を使い、そうした人間がどのように犯罪に走るかを分析する本書から、学ぶことも多いはずだ。

——人を殺した少年の人生——

最後に紹介したいのは、神戸連続児童殺傷事件の犯人、元少年Aによる『絶歌』だ。出版直後話題となり、非難轟々の本書は、それでもやはり読まれるべき価値を持っている。(しかし事件と本を分けて考えられないならば、本書を読むべきではない。)

本書は主に二つに分けられる。異常な性癖をもち、それに抗えないまま犯罪を起こす前半と、当時一四歳という年齢で死刑になれず匿名のまま生きていく後半だ。詩的文体、残酷さを美的に記述する前半も強烈だが、後半こそ本書の真骨頂だろう。

正しさは時に矛盾する。人々は、犯罪者は一生不幸であるべきだと考える一方で、すべての人間は幸せになる権利があるとも考える。本書の価値は、この二つの葛藤だ。社会も自分も、自分の幸福を望まない。しかし接する他者が時に、優しさを授けてしまう。幸福になることが許されない人間が、幸福になる権利を持つ世界で生きる。償いとは何か、罪人の幸せとは何か。彼が描く文章は、想像の及ばない人間の葛藤を、私たちに教えてくれる。(きもの)



実は激アツ「承久の乱」をめぐる「戦い」

呉座勇一の『応仁の乱 戦国時代を生んだ大乱』を嚆矢として、近年、歴史学者によって一般向けに書かれた新書が、次々とベストセラー入りしている。今回は、そんな新書の中から、本郷和人の『承久の乱 日本史のターニングポイント』（文春新書）（以下、本郷本と略記）と、坂井孝一の『承久の乱 真の「武者の世」を告げる大乱』（中公新書）（以下、坂井本と略記）を取り上げたい。

本郷自身が二〇一九年二月一六日の日経新聞「日本史ひと模様」というコラムにおいて、自身の本と坂井本を比べ、明快に結論を語る本郷本よりも、難解に答えを出さない坂井本のほうが読者にありがたがられるからよく売れるのだ、と述べるなど、本郷本と坂井本の比較は各所で行われている。しかし、承久の乱そのものをめぐる論争は、十分取り上げられていない。よって本稿では、まず、承久の乱の論点を整理したうえで、本郷本と坂井本の比較を行いたい。

幕末の水戸学の隆興から、アジア太平洋戦争における敗北までの皇国史観の文脈において、「承久の乱」は、「逆賊」北条義時が後鳥羽上皇を不遜にも島流しにした事件として語られてきた。このため水戸学の精華『大日本史』においては、上皇が被った「難」として「承久の難」と呼ばれた。また、皇国史観においては「承久の変」と呼ばれ、一部保守系の教科書では現在も「承久の変」という呼称が使われ続けている。しかし、この点に関しては本郷本、坂井本ともに一貫して「承久の乱」という呼称を採用している。

また、承久の乱をめぐるのは後鳥羽上皇の目的が北条義時の追討にあったのか、鎌倉幕府の倒幕にあったのか、議論がこれまで分かれてきたが、両書ともに、近年の研究状況を反映し、後鳥羽上皇の

目的は義時追討であり、倒幕ではなかったという立場をとっている。なお、なぜ、「倒幕」が目的として理解されるようになったかについては、坂井本の最終章において述べられている。

本郷本、坂井本の立場が決定的に異なるのは、鎌倉幕府の位置づけである。本郷自身が「私は『東国国家論』の立場に近い」（一四七頁）と語るように、本郷本は鎌倉幕府と朝廷をそれぞれ独立した政治機構であったと捉える。これに対し、坂井本は、王家、公家、武家、寺家が、王家の権威に支えられながら、それぞれ相互に影響しあい体制を形作っていたという「権門体制論」の立場に立つ。

よって、本郷本は、源実朝暗殺後の鎌倉幕府の「義時とその仲間たち」（二六一頁）という自己意識と、後鳥羽上皇の権門体制論的意識の対立が承久の乱を生んだと解釈する。これに対し、坂井本では、実朝暗殺に端を発した後継將軍の親王下向問題がこじれ、そこに後鳥羽上皇の命による大内裏再建への地頭の協力拒否などが重なり、承久の乱に至ったととらえる。

また、本郷本は北条氏を権謀術数の政治家一族として描き、その理解から歴史事象を説明するので、鎌倉幕府の成立、北条氏の権力獲得から解説を始める。一方、坂井本は後鳥羽上皇・実朝ともに優れた政治家として描き、さらには、権門体制論の歴史観に基づくので、中世の院政の成立とその社会・政治構造の解説から始まる。

本郷本は論旨が明快であり、歴史に詳しくない方が初めて読む本としておすすめである。しかし、「承久の乱」を巡ってはこれまで述べたように様々な議論がある。本郷本と違う立場から学術的に詳述した坂井本も併せて読むことをおすすめする。（投稿：行人）

編集後記

ずっと、言葉を探して生きてきた。この一瞬の感情を切り取る言葉、自分を支える言葉、大切な人へ思いを伝える言葉——。ずっと、言葉を探して生きてきた。そんな人生だった。

4月になると、生活が一変した。学部時代と異なる研究室へ移り、4年間住み慣れた下宿も引っ越した。気がつけば自分は大学院生になっており、気がつけば友人は社会に出て毎日働いている。今を切り取る言葉も見つけれないまま、毎日が目まぐるしく変わっていく。そんな4月に、思わず目眩がした。

そんな私に一通の連絡が入った。学部時代の先輩からだ。聞けば綴葉編集委員へのお誘いだという。最初は、断ろうかと思った。書評など、私にできるのだろうか。本の面白さを伝える言葉など、私に見つけられるのだろうか。そう思ったからだ。しかし、あえてこの世界に踏み込むことにした。これも何かのご縁だと思って。

こうして私は、6月よりこの綴葉編集委員となることになった。正直不安もあるが、少しずつ、自分のペースで言の葉を綴っていきたい。満点は取れなくても、せめて「出席点」くらいは貰えろと信じて——。(出席点)

当てよう！ 図書カード

時間ができたら、観劇に行ってみたい。自分の身体や経験から、自分じゃない誰かを引き出してくる——取り憑かれたような役者の気迫を、同じ空間で感じたいものです。さて、以下のシェイクスピアの戯曲のうち、7－9月に東京・新潟・愛知・兵庫・熊本などで公演がある作品はどれでしょう？

1. じゃじゃ馬ならし
 2. お気に召すまま
 3. ハムレット
 4. 恋の骨折り損
- (ミセ)

《応募方法》読者カードに答えを書いて生協のひとことポストに入れてください(またはe-mail:teiyo@s-coop.net)。正解者の中から抽選で5名の方に図書カードを進呈いたします。締切りは7月15日です。

3月号の解答

3月号の「リシュケシュを訪れた有名なロックバンドは？」の解答は1. The Beatlesでした。RINGOも東山湯もBeatlesが好きで、京大生にはなじみ深いですね。応募者12名中12名の方が正解でした。図書カードの当選者は、ハードラーさん、ケロニアさん、ぽぼんたさん、フッファーさん、G3さん(順不同)です。おめでとうございます。(きもの)

読者がらひつじ

○良書に出会うことが人生の喜びです。良書を発見する手がかりを得るために、今後も書評を読んでいきたいと思っています。これからも刺激的な本を紹介していきます。

(文・pratyeka)

— ありがとうございます。執筆者の一人としては、書評の出来不出来はともかく、良書を紹介することにかけてはそれなりに自負しております。願わくは、書評の質が書籍の美点に適うものでありますように。

○同じ本について一人ではなく数人の感想も書いてみたいです。きっと感じるころや好きなところ、多角的に見た書評もおもしろいと思います。

(工・ねいねい55)

— 今号の話題の本棚欄にて、二人で一冊の本を評してみました。いかがでしょうか。今後複数の編集委員が同一の本に興味を抱いた場合は、ぜひ挑戦してみたいですね。

○新入生が入ってくる時期ですね。読書体験のともとして綴葉に出会ってほしいと嬉しく思います。

(工・Soso)

— 読者の方々から頂く『綴葉』への深い愛に襟を正される思いです。衷心より感謝申し上げます。

(霊人)